

コリント人への手紙第一6章12節 「すべてが許されているキリスト者」

1A 自由に召されたキリスト者

1B 律法に対する死

2B 愛に囚われた者

1C キリストに結ばれた者

2C キリストのしもべ

3C 互いに仕え合う自由

3B 御霊によって洗われた者

2A 留まる自由

1B 益になる生き方

1C 賞を得るための競走

2C 枷からの自由

2B 支配されない生き方

本文

コリント第一 6 章を開いてください。聖書通読の旅は、コリント第一 5 章まで来ました。午後に、6 章を一節ずつ学んでいきたいと思います。今朝は、6 章 12 節に注目します。「**すべてのことが私には許されている**」と言いますが、すべてが益になるわけではありません。「**すべてのことが私には許されている**」と言いますが、私はどんなことにも支配されはしません。」コリントの教会の人たちに、性的な不品行、淫らな行いをしている問題がありました。そして、彼らがよく口にしていた言葉に、「**すべてのことが私には許されている**」というものがありました。もしかしたら、パウロがキリスト者にある自由を教えている時に使っていたかもしれません。けれども、この言葉を歪曲して、性的に乱れていても、キリスト者としては許されているとしていたのです。パウロは、「**すべてが益になるわけではありません**」また「**私はどんなことにも支配されはしません。**」という言葉をもって、キリスト者にある自由を弁明、説明をしています。

まだ信仰を持っておられない方々から、しばしば質問を受けますね？「クリスチャンは、お酒を飲んではいけないのですか？」であるとか、「クリスチャンは、これこれをしてはいけないのですね？」とかいう質問です。そうした質問には、宗教を持つと、いろいろ生活に制約が出てくるという思い入れがあります。これをしてはよい、これをしてはいけないという規則や規範が宗教であり、キリスト教もその一つだと思っています。

けれども、キリストへの信仰を持っていながら、そのような考えを持ってしまうこともありますね。「クリスチャンは、お酒を飲むことができるのか。」「クリスチャンは、どこまでの異性との付き合い

ができるのか。」「どこまで教会に通えばよいのか」「どこまで献金すればよいのか」そういった質問をする時に、自分の心の動機を思い直さないといけません。もしかすると、「どこまで自分が世の中で楽しむことができるのか？」という問いになってしまっている場合があるからです。何をしてもいい、何をしてもいけないのか、という問いには、実はキリスト者として召された目的を台無しにしてしまう危険があります。世の人、まだ信じていない人と同じ質問をしている、つまり世の楽しみや思い煩いをどこまでできるのか？という、コリントの人たちの問題、肉の問題がそこにはあります。

1A 自由に召されたキリスト者

パウロは、ガラテヤ人への手紙で、このようにはっきりと言いました。「5:1 キリストは、自由を得させるために私たちを解放してくださいました。ですから、あなたがたは堅く立って、再び奴隷のくびきを負わされないようにしなさい。」ガラテヤの信者は、ユダヤ教にある数々の律法のきまりを、異邦人であるにもかかわらず守り始めました。それに対して、そのようなことで義と認められようとするのは、自ら奴隷状態に置くのだよ。そうしたところから解放されたのがキリスト者であり、キリスト者は自由を得るために召されたのです、ということなのです。

1B 律法に対する死

私たちはローマ人への手紙を学びましたが、7 章で、このことをパウロは話していました。「7:4 ですから、私の兄弟たちよ。あなたがたもキリストのからだを通して、律法に対して死んでいるのです。それは、あなたがたがほかの方、すなわち死者の中からよみがえった方のものとなり、こうして私たちが神のために実を結ぶようになるためです。」パウロは、「律法に対して死んでいる」と言っています。律法によって、規則によって自分を救おうとする試みに対して死んだのだということで、律法に対して死んでいると言っています。

2B 愛に囚われた者

このことを説明するのに、パウロは、結婚についてのおきてを説明しました。結婚していて、相手が生きている間に他の男、あるいは女に所に行けばそれは姦淫であるが、相手が死んだ後に再婚しても、それは罪ではないというところから、こんな適用をしています。夫はキリストです。このキリストに結びつくのに、律法によって結びつこうとしたら自分は死んでしまいました。一人目の妻、古い自分は死んだのです。死んだので、二人目の妻、つまり、信仰によってキリストに結びついた、新しい自分です。律法によって神につながろうとする自分が死ぬことによって、初めて新しくされることができるし、新しくされた自分がキリストに結びついているのだということです。

1C キリストに結ばれた者

言い方を変えると次のようになります。自分が、これを行うことによって、あれを行うことによって神に正しいと認められるという生き方には死んだ。あくまでも、キリストの愛に捕らえられて、この方の愛によって自分が変えられ、この方に従っているのだということです。愛によって、キリストに

結びついているということなのです。

愛には、掟を必要としません。いや、掟の目的を全うします。「ロマ 13:9-10 「姦淫してはならない。殺してはならない。盗んではならない。隣人のものを欲してはならない」という戒め、またほかのどんな戒めであっても、それらは、「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」ということばに要約されるからです。10 愛は隣人に対して悪を行いません。それゆえ、愛は律法の要求を満たすものです。」キリストに愛され、それゆえ、この方を愛しています。そこに、これをしてはいい、これをしては悪い、というような判断基準は意味を成しません。この方を愛しているから、この方を喜ばせたい。罪を犯すのは、自分が罰を受けるからではなく、愛してやまないイエス様の心を悲しませてしまうからだ、となります。したがって、愛によって律法の要求を全うしているのです。

2C キリストのしもべ

それゆえ、使徒たちは、自分たちのことを「イエス・キリストのしもべ」と呼んでやまなかったのです(ロマ 1:1 等)。自分に何が出来るかというような、権利を求めるのではなく、キリストの無私な愛に触れられて、自分自身も権利と呼ばれているものをすべてイエス様の前で放棄して、この方の所有のもの、しもべになったのです。

そもそも、イエスご自身が最も自由な方ではありますが、この方はご自分でしたいこと、願っていることを行われませんでした。父なる神の独り子として、また地上において、主のしもべとして、父の願われていること、神の願われていることを行うことだけの心を留めておられたのです。父なる神に従うことこそが、最も自由になる道であることをイエスご自身こそが知っておられました。ゆえに、この方に呼ばれて、捕らえられた者たちも、イエス様に従うことこそが、最も自由になる道であることを知っているのです。そもそも、神が人を造られた時に、神に似た者として造られました。人が神により頼み、この方に聞き従うことによって、造られたものを支配するように造られたのです。だから、従うことによって、あらゆることをする自由と権利が与えられているのです。

3C 互いに仕え合う自由

パウロは、自由について、ガラテヤ人への手紙でこうも言っています。「ガラ 5:13 兄弟たち。あなたがたは自由を与えられるために召されたのです。ただ、その自由を肉の働く機会としないで、愛をもって互いに仕え合いなさい。」自由を得ることが出来ました。けれども、その自由を自分自身のために使う以上に、愛をもって互いに仕え合うために用いることができます。愛というのは、自発的ですね。もし規則によってであれば、その奉仕は意味のないものになります。けれども、自由を得ました。その自由とは、自分中心で生きるのではなく、キリスト中心で生きることのできる自由です。それゆえ、自分というものに囚われずに、自分がこれこれを行っていいのかどうか、ということではなく、他の人々がどう思っているのか、どう感じているのか、そういったことを思いながら、仕えることができるのです。神への愛、人への愛によって、自分に対して自由になっているのです。

3B 御霊によって洗われた者

ゆえに、「**すべてのことが私には許されている**」という言葉は、ある意味当たっているのです。それは、良いことについて、すべてのことを行う自由が自分に与えられていると言ってよいでしょう。良いことを行うことができなくなっている、罪によって墮落しているからというのが、失われた状態です。けれども今は、神のみこころを自由に求めることができ、自分を度外視してそれを行っていくとする自由があります。

ですから、コリントの人たちが考えているような、肉の行いを何でも許されるということではないのです。むしろ、それらの行いから、御霊によって洗い清められた者に与えられた恵みです。「6:9-10 あなたがたは知らないのですか。正しくない者は神の国を相続できません。思い違いをしてはいけません。淫らな行いをする者、偶像を拝む者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、10 盗む者、貪欲な者、酒におぼれる者、そしめる者、奪い取る者はみな、神の国を相続することができません。11 あなたがたのうちのある人たちは、以前はそのような者でした。しかし、主イエス・キリストの御名と私たちの神の御霊によって、あなたがたは洗われ、聖なる者とされ、義と認められたのです。」

2A 留まる自由

1B 益になる生き方

パウロは、コリントの人たちが言っているこの言葉を使って、すべてのことが許されているけれども、その自由を自由として保っていることができる方法を教えます。私たちは自由というのは、守らなければいけないことをあまり知りません。そのまま何もしなければ、その自由はたちまち消えていきます。不断の努力をもって守っていくものです。

1C 賞を得るための競走

まず、「**すべてが益になるわけではありません。**」と言いました。ここの益は、目的にかなうというような意味があります。これを分かりやすく言うならば、パウロがまさに絶えず例として使っている競走です。パウロの生きていたローマ時代は、ギリシア時代からのオリンピックが盛んでした。コリントの隣町、イストミアには、オリンピックと同じイストミア祭という、スポーツの祭典がありました。競技や競走は、人々にとってとても身近な存在だったのです。

ピリピ人への手紙 3 章 13-14 節には、こうあります。「13 兄弟たち。私は、自分がすでに捕らえたなどと考えるはしません。ただ一つのこと、すなわち、うしろのものを忘れ、前のものに向かって身を伸ばし、14 キリスト・イエスにあって神が上に召してくださるという、その賞をいただくために、目標を目指して走っているのです。」これはまさに、競走選手が、ゴールを目指して走っていて、最後のゴールに身を伸ばして、0.1 秒でも早くしようとする姿であり、そして、優勝した暁には、総督や皇帝から、ユーカリでできた冠をいただくという光景であります。コリント第一にも、競走につい

てパウロは書いています。「9:24 競技場で走る人たちはみな走っても、賞を受けるのは一人だけだということを、あなたがたは知らないのですか。ですから、あなたがたも賞を得られるように走りなさい。」

賞を得られるように走りなさい・・・当たり前ですね。出場すること自体を目的にしている選手も、ごくまれにいますが、ほとんどの選手は賞を得られるように走ります。そこで、私たちはこういうことを考えて見なければいけません。「競走をする時に、登山靴を履いて走りますか？」ということです。そのような重い靴は、競走する時にはあまりにも不適切であり、走るのに妨げになります。登山にはもちろん適していますが、競走には妨げになります。けれども、靈的には、「クリスチャンは、これこれをしていいですか？」と尋ね、罪になるかどうかわからないすれすれのところまで許されて、世の中の生活と変わりなくなるべく生きたいと思っている人々は、まさに、重い靴を履いて競走しているようなものです。競技の規則には、靴について登山靴を履いていけないという禁止項目はないのです。だから、履いてもいいのです。けれども、賞を得るといった目的には大きな妨げになるのです。

2C 枷からの自由

それで、ヘブル人への手紙の著者が、このように話しています。「ヘブル 12:1-2 こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、一切の重荷とまわりつく罪を捨てて、自分の前に置かれている競走を、忍耐をもって走り続けようではありませんか。2 信仰の創始者であり完成者であるイエスから、目を離さないでいなさい。この方は、ご自分の前に置かれた喜びのために、辱めをものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されたのです。」イエス様のお姿にあずかりたいという、究極の願いがキリスト者にはあります。しかし、あることをすることによって、その歩み、また競走に重荷になったり、妨げになるようなことがあるなら、喜んでそれを捨てればよいのです。もはや基準は、これが良いか悪いことかではなく、自分にとって益になるか？で生きていくのです。そうやって生きていく人には、これは許されているのか、そうでないのかは関係がなく、自由にすることができます。

そういった事柄は、いろいろあるかと思います。例えば、「宝くじをすることは罪ですか？」という問いについて、「そういったことでお金儲けをしようとしても、お金が飛んでいだけですね。」と私なら答えます。「箴言 23:5 あなたがこれに目を留めると、それはもうないではないか。富は必ず翼をつけて、鷲のように天へ飛んで行く。」そして、主は必ず必要を満たされるので、そういったことを心配しないで、主に命じられていることを行っていればよいとすれば、自由になれますね。宝くじで、心を一喜一憂させている暇があるならば、自分の身近にいる人々の救いのために祈り、また兄弟姉妹のために良いことができないか考えていくことに費やしていけます。

2B 支配されない生き方

次にパウロは、「私はどんなことにも支配されはしません。」と言いました。何かを行なっていけば、それが習慣となり、その習慣の奴隷となってしまいます。自分はこれこれをして自由だと思っていますが、実はそのしていることの虜になってしまっていることがあります。実際的にも、何かに依存していることは、自分は、これで最後だ、自分はいつでもこれをやめられる、と思っています。しかし、自分はその支配の下に入っているということに気づいていない、いや、気づいているのですが認めたくないのです。

ロマ書で、私たちはこのことについて既に学びました。「6:16-18 あなたがたは知らないのですか。あなたがたが自分自身を奴隷として献げて服従すれば、その服従する相手の奴隷となるのです。つまり、罪の奴隷となって死に至り、あるいは従順の奴隷となって義に至ります。17 神に感謝します。あなたがたは、かつては罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの規範に心から服従し、18 罪から解放されて、義の奴隷となりました。」私たちは、イエス・キリストを信じることによって、それに服従しました。それによって、罪から解放されました。義を行なう自由が与えられたのです。しかしこれを維持するためには、絶えず、自分がその自由を保っているかを確かめる必要があります。

先ほど宝くじの喩えを話しましたが、この説教の準備をしている間に、なんと、他の昔の説教者の方が、こんな実感のこもった話をしておられることを知りました。榎本保郎牧師という方です(1977 召天)。「教会生活を長く続けていると、主イエスの十字架の恵みという言葉は何度も聞かされる。初めの内は、感動して聞いていたが、そのうち耳にたこが出来るような思いになってしまう。また、その話か。もうその話は十分に聞いた。そんな思いで、十字架の恵みの話を聞くようになってしまう。そして、主の十字架の話よりも、宝くじで百万円当たった、という知らせの方に感動するようになってしまう。そんなことはないだろうか。」十字架の恵みを知るのは、永遠がかかります(エペソ 2:7)。けれども、それを数年聞いていて耳にたこができてしまうのが、私たちの性質なのです。そして、百万円ごときで感動してしまう。神の御国には、百万円どころか、国家予算をはるかに越えた富を、キリスト者には任されるのに…。ですから、「私はどんなことにも支配されはしません。」ということは、不断の努力が必要なのです。

もう一度、思い出しましょう。私たちの信仰の目標は、イエス様です。イエス様は、何物にもとらわれないで、ただ父のみこころを行うことを選ばれた、地上で最も自由な方でした。神を愛し、人を愛されることには、何の妨げもなく行われました。その自由を持っているイエス様の自由を、私たちは恵みによって与えられています。いろいろ考えて、何がイエス様を喜ばせることになるだろうと思う時に、いろいろな可能性が出てきます。信仰によってそれを踏み出すのに、すべてのことが許されています。時に、これはとんでもない考えだともできます。多くの人が思いわずらいがあってできないことを、いとも簡単にすることができます。キリストにあって、自由だからです。このような時に初めて、「すべてのことが私には許されている」ということができるでしょう。